蘇る漂白のモダニスト

――『劉吶鷗全集』（全五巻）を評す――

斎　藤　敏　康

はじめに

かつて疾風怒濤の1930年代上海を慌ただしく駆け抜けていったひとりの男がいた。劉吶鷗がその人である。吶鷗は20世紀のはじめに台湾で生まれ，10代に内地すなわち日本の学校で学んだ後，20年代後半には上海に渡り，当時上海を風靡していたモダニズムの時代思潮の中で作家・映画人として活躍した。しかしおよそ10年後，暗殺という痛ましくも不幸な死によって歴史の舞台をおりたのであった。その彼が，60年余を隔てて，台湾で再び人々の記憶に蘇えりつつある。

施蟄存，戴望舒らとともに30年代上海の「現代主義」文学を牽引した劉吶鷗の文学・映画の分野での仕事を網羅した『劉吶鷗全集』全五巻が，2001年３月，はじめて台湾で出版され，前後して吶鷗を論じる評論や研究も発表されはじめた。台南から東京そして上海へと海を跨いで異文化を求め，文学者・映画制作者として30年代上海文化界に足跡を残した芸術家にやっと真っ当な探究の視線がそそがれはじめた感がある。

ただ劉吶鷗を含めた現代派文学については，中国では80年代初頭から再評価が始まっており，中国における近代モダニズムの濫觴として盛んに論じられた一時期をすでに経てきている。すなわち厳家炎氏や賈植芳氏が「流派文学史」という文学史構成の中で現代主義あるいは「新感覚派」として施蟄存，穆時英，劉吶鷗らいわゆる30年代モダニストの文学的営為の再評価を試みたことを皮切りとして，80年代から90年代にかけて多くの研究論文が発表された。管見のかぎりでも，32年に創刊される雑誌『現代』を中心に現代派を論じた本格的な論文は二百篇を優に超える数に上るし，施蟄存，穆時英ら個人に焦点を当てた専論も数十篇を下らない。ただその中で劉吶鷗に関する専論は確かに多くはないが，それは吶鷗の作品の量と質や作家としての現代派内での位置などにもよることであると思われる。この他に戴望舒を中心とした現代詩派に関する研究もまた極めて盛んである。こうして80年代後半以降に出版された文学史では，吶鷗を含む現代主義文学に関する70年代までの一面的な評価はもはや基本的に覆されている。さらにこうした，上海を中心とした現代派文学研究の進展は，「海派文学」や40年代の淪陥期文学研究とりわけ張愛玲研究等に拡散しながら今日に及んでいるのが実情である。

台湾では，37年間続いた戒厳令のもと，二二八事件や50年代白色テロリズムという民衆抑圧，政治思想弾圧の中で，文学は時に屈折した精神の漂白を経験した時期があった。しかし自己表現空間の拡張を主張する文学的な営みは総じて現実に対する絶え間ないプロテストの姿勢に貫かれ

ていたといえる。すでに70年代に「郷土文学論争」という形をとって文学的自己主張の突破口を開いた文学者たちのエネルギーは，美麗島事件を経て80年代にはいると政治社会システムの民主化あるいは「台湾化」を求める政治運動とも呼応しながら，台湾アイデンティティに基づく広範な文学・歴史像の再構築に向けられることになる。その中で小説や映画を通して二二八事件や50年代テロなど封印されていた歴史の再評価を求める声が発せられ，左翼文学への禁も解かれる。さらに台湾アイデンティティを日本統治時代に遡及させて，かつて日本統治下で文学を通じて台湾人意識を育んだ作家に再び光が当てられ，いわゆる台湾人皇民化政策下の文学に対しても屈折した心理の襞にせまる評論が少なくない。

しかし，「もはやタブーは何もない」と言われる台湾でも，これまで劉吶鷗を取り上げることはやはり躊躇われてきた。それは彼がその短い人生の最後の段階で日本の大陸政策の橋頭堡として画策された南京の汪精衛政権のもとで，日本の映画人と協力して「大東亜思想」の喧伝のための映画づくりに関与したこと，あまつさえその結果，当時の重慶政府系の特務ないしは黒社会組織の手にかかって暗殺されたという，いわば「汚れた晩節」が障害になっていたことは否めないであろう。汪精衛政府が発刊を準備していた「国民新聞」社の社長であった穆時英がやはり重慶政府の特務に暗殺された後，劉吶鷗は宣伝部長林柏生の要請を受け穆時英の後を継いで国民新聞社社長に就任した。劉吶鷗は，「日本と支那の関係は同文同種，しかも二つの独立した主権を持ち，相救け合うという点で，英国と米国の関係の如くにならなければならないのだ[1)]」という抱負をもって汪政権の「和平救国運動」に自覚的に参加していった。しかしそれは日中全面戦争後，重慶に撤退し抗日文化活動を継続していた人々から見れば「漢奸」として非難さるべき選択であった。

今回の全集発刊に際して，編集者たちはこうした劉吶鷗の政治的立場に関わる問題について立ち入って明確な評価をあたえてはいない。後で少し紹介するように，編集者たちの意図は30年代上海のモダニズム文学運動を担った台湾人としての劉吶鷗を強調すること，すなわち台湾アイデンティティの文脈に積極的に劉吶鷗を取り込むことにあるように思われる。それによって台湾文学史に劉吶鷗を位置づけ，また台湾文学史の台湾を超えた拡張と展開を構想することも可能になるとの目論見を見て取ることができる。

かつて台湾文学は，日本統治時代には日本文学の周縁にあるものとされ，また中国との民族的，言語的，歴史的関係から，戦前もそして戦後の国民党統治時代においてもずっと中国文学の周縁にも位置するものと漠然と認識されてきた。その台湾文学を，台湾人意識に基づく独自な文学として構築し直そうとする議論が興って以来，「台湾文学とは何か」という問いかけが絶えずなされてきた。山口守氏は，その問いによって「台湾文学の本質を問うというより，むしろ台湾文学をめぐるさまざまな考えや議論を呼び起こす契機として考えた方がより生産的な思考へと発展するだろう[2)]」と述べている。文学に限らないが，歴史的近代に形成されて二十世紀の冷戦期を規定してきたカテゴリーに依拠するだけでは「台湾」を適切に捉えることは難しい。その意味で，いわばディアスポラ文化人としての劉吶鷗を，台湾人による台湾を超えた文学的営為のダイナミズムの中に位置づけようとする試みは十分に意義のある探究であるといえる。

本稿は，『劉吶鷗全集』全五巻の内容を概略紹介し，その出版の文学史的な意味を考えつつ，とくに全集で初めて公表された劉吶鷗の1927年の日記に拠りながら，劉吶鷗の文学観や文学に関

わる活動の意義について考察してみたい。

〔一〕『全集』の概要

まず初めに『全集』の概要を巻毎に紹介する。

第一巻『文学集』は，劉吶鷗の唯一の小説集である『都市風景線』所収の「遊戯」など八篇の短編小説，それに雑誌『現代』に載った代表作のひとつ「赤道下」など合計十篇の小説と『無軌列車』『現代』の二誌および劉吶鷗自身が編集した『色情文化』に収めた片岡鉄兵著「色情文化」など十二篇の翻訳，それにフランスモダニズム文学の始祖ともいえるポール・モランを論じた「保爾・穆杭論」一篇を収める。

序文は中央大学中文系の康来新氏によって書かれている。康来新氏は，上海新感覚派の成立と展開を小説，評論の執筆によってだけではなく，書店の設立や雑誌の発刊など経営，財政的にも支えた，つまり上海モダニズムを創作と経済の両面に渡って振起したのは台湾人劉吶鷗であったことを強調している。そして作家としての劉吶鷗について，国家や人民の苦難，あるいは政治や社会に向けた譴責や抗議や吶喊を内容とするそれまでの文学に対して，新しい時代の女性美を「欣賞」する文学を対置したとし，「彼（劉吶鷗―斎藤注）は美しい女性の魅力的な言葉や挙措に敬畏と親愛の心懐を抱いているのだ」と述べて，上海に生きる「近代女性」の生態を描いた劉吶鷗を評価している。

第二巻『電影集』は，劉吶鷗が明星公司に入社して書き上げ，その後，藝華影業有限公司での映画化に当たって自ら監督した映画シナリオ「永遠的微笑」が中心である。すなわち「永遠的微笑」および「A lady to keep you campany」の二篇の「電影劇本」と『無軌列車』「影戯漫想」欄に連載した「影戯・芸術」など七篇の映画評論，『電影週報』所載の「影片藝術論」一篇，『現代電影』所載の「Ecranesque」など六篇のやはり映画評論，合計十四篇の評論文と「其他散篇」二篇からなる。ただどういうわけか『現代電影』に連載の評論のうち第三期に掲載された「欧州名片解説」だけが漏れている。

やはり巻頭には黄仁氏による序文（「『永遠的微笑』劇本重刊序」）が置かれている。『永遠の微笑』は，トルストイの『復活』のモチーフを劉吶鷗が翻案した劇本である。黄仁氏は，中国の映画史や映画辞典が劉吶鷗の映画論の言葉尻をとらえて『永遠の微笑』を「軟性映画」と批判することに対して，これは当時の女性の情況を反映した「女性映画」であると述べ，主演俳優である共稼農の「社会悲劇文芸」であるという評言も引用する。『永遠の微笑』の芸術的価値，映画としての技術水準，劉吶鷗の映画論はいずれも再評価されるべきことを強調している。

第三巻『理論集』は，1930年に劉吶鷗が昇曙夢の日本語訳から重訳したフリーチェ著『芸術社会学』一書が中心を占め，他にやはりフリーチェの「藝術風格之社会學的實際」や，マヤコフスキーを論じた二篇の文章など合計五篇の評論からなっている。巻末には昇曙夢の筆になる「原著者略伝」も収めている。劉吶鷗が翻訳したフリーチェの『芸術社会学』は当時，戴望舒，施蟄存ら現代派文学者に影響をあたえただけではなく，魯迅，茅盾や左翼作家聯盟の構成員の関心も呼んでいる。また李瑞騰氏が巻頭の「序」で簡単にフリーチェの芸術論を紹介している。

第四巻『日記集』（上・下）は，この全集によって初めて公開される劉吶鷗の1927年１月１日から12月31日までの日記である。現代派だけではなく20，30年代の主な作家に広げてみても，文壇がひとつの転機を体験しつつあった1927年という時期に，これほど細かに自身の文学活動と生活のディティールを綴った日記は，魯迅日記を除けば存在しない。自らの心覚えであって発表を前提としていないがゆえに，文字は時に乱雑で首尾整わず，解読不能な程に書きなぐられてもいるが，文学仲間との行き来や，書物や映画の批評も識され，時には赤裸々な情感も吐露されていて，劉吶鷗の肉声を聴く思いのする文面も少なくない。

黄英哲氏とともにこの日記の校閲に当たった彭小妍氏が，「導讀」として「浪蕩天涯――劉吶鷗一九二七年日記――」と題する評論を書いている。彭氏は，日記の内容を紹介しつつ，そこに識された劉吶鷗をめぐる人々，たとえば妻子や親族あるいは友人等に触れ，また4.12反共クーデタ前後の上海の騒憂の情況や，九月下旬以降，戴望舒と行を共にする北京へ向けた旅游のあらましなどについて述べる。そしてなによりも日記の叙述から立ち上ってくる劉吶鷗の漂白と放浪の性格，それは台湾人でも日本人でもまた中国人でもありながら，しかしそのいずれにも自己を投機できない存在の不安定性の所産であるのだが，そうした情調を人生の基調低音として，それゆえにこそ国境や海峡という有形の境界を超え，国家主義や民族主義といったイデオロギーの桎梏を脱して，文学や芸術の一種コスモポリタンな審美的価値の世界にアイデンティティと生きる縁を求めようとした劉吶鷗の生きざまを的確に評論している[3)]。なお，下巻末の「劉吶鷗一九二七年日記知友一覧」および秦賢次氏の手になる「劉吶鷗日記中的舊雨新知」が人間関係を知る上で非常に参考になる。

第五巻『影像集』は，全集の中心的な編集者である許秦蓁氏の劉吶鷗評伝と非常に豊富な写真資料から構成されている。許秦蓁氏は台湾ではおそらく初めての劉吶鷗をテーマにした修士論文「重読台湾人劉吶鷗―歴史與文化的互動考察」を中央大学（台湾）に提出しており，この評伝もその学位論文が基になっているものと思われる。評伝の構成を窺うために，目次を紹介しておきたい。

前言―重讀「臺湾人」劉吶鷗之必要

壹，南臺第一世家子

貳，文学史的一張缺頁――新感覚派是臺湾人的上海「製造」

参，「無国籍」與「跨國界」――地縁與人縁

肆，電影史的左右為難――持撮影機「遊行」於「人間」

伍，重讀臺湾人，重讀文学史

黄武忠氏が「従『無軌』到『歸鄉』――喜見劉吶鷗文学作品重見――」と題する序文を寄せ，また巻末には「拆閲劉吶鷗的『私件』與『公物』」および「劉吶鷗藝文繫年」を「附録」として収める。

〔二〕『全集』出版の背景と意義

(1)　汪精衛南京政権に“参加”した“漢奸”劉吶鷗の復権

『劉吶鷗全集』は台南県政府に出版資金を仰ぎ，台南県文化局を「出版者」として出版されている。奥付によれば財団法人台南県文化基金会も出版に協力していることがうかがわれる。[4] そうした経過もあってか，文学者の『全集』にはあまりないことであるが，総序を台南県県長の陳唐山氏と台南県文化局局長の葉佳雄氏が執筆している。そして両氏とも，劉吶鷗が台南県柳營の輩出した幾多の名人伝の系譜に位置づけられ，この全集によって忘れられた芸術家の埋もれた業績が掘り起こされることの意義を強調する。すなわち「とりわけてその前衛的な論述は多くが主流の観点と合わず，従ってその一生の事業には公正な評価が欠けており，一再ならず無視や誤解を受け，生卒年月日や学歴まで諸説紛々というありさまである。」（陳唐山「迎接劉吶鷗返郷」），あるいは「台湾文学及び映画の領域における多才多芸をもってする成果と貢献を，そのあるべき姿に戻し，台湾文学史に重ねて位置づける必要性を文学界はこぞって認めている」（葉佳雄「劉吶鷗傳奇」）という具合である。

確かに忘れらた芸術家の真面目を回復することにこの出版が資することは贅言を要しない。しかし芸術家がなぜ忘れられてしまったのか，その業績がなぜ埋もれてしまったのかについて，両氏の序文には深い言及がない。遺族から70年ぶりに提供された日記が，学界に驚きをもって迎えられるような空白と忘却がなぜ生じたのか。その原因のひとつに劉吶鷗がかつて汪精衛政権の文化部門で仕事をし，そのことによって当時から漢奸と批判されていた経歴の問題があったことは確実であろう。

1945年（中華民国34年）日本の敗戦にともなって蒋介石国民政府は汪精衛南京政府関係者に対して「漢奸裁判」を行ない広範な関係者を厳しく断罪した。「漢奸」とは「中国人にして，敵に通謀し，反逆罪を犯した売国奴」と定義され「懲辦漢奸条例」という法律も存在していた。劉吶鷗を国民新聞社社長に誘った宣伝部長林柏生は汪政権の大立て者としてただ一回の審理の後に死刑を宣告された。穆時英，劉吶鷗が相継いで凶弾に倒れた後，敗戦時に国民新聞社社長の地位にあった陳日平は無期懲役の判決を下された。映画，演劇関係者もまた例外ではなく，とりわけ名誉董事長に陳公博，周佛海，楮民誼，董事長は林柏生という顔ぶれを揃えていた中華電影聯合股份有限公司には厳しい粛奸の嵐が吹き荒れた。経営陣だけでなく監督，俳優たちも責任を免れることはできず，監督の張石川をはじめ女優の李明，陳雲裳，陳燕燕，李麗華や男優の梅熹，何仲山，周詩穆など幹部級の俳優十数名が裁かれた。[5] 劉吶鷗は東宝のプロデューサーであった松崎啓次との関係で中華電影股份有限公司に加わった時にすでに漢奸の汚名を着せられることを覚悟していたし，実際，重慶派の映画人からは当時から漢奸と非難されてもいた。1940年（民国29年）12月27日重慶の国泰戯院において国民党文化工作委員会が開かれ，一年間の「抗日建設芸術」に関する議論が行なわれたが，その席上，監督の史東山は映画について発言した中で「我々映画製作者の中から祖国を売る反逆者が続出しつつある。彼等反逆者の代表者として，劉吶鷗は我々の手で射殺された。この事は，反逆者共に対する厳しい教訓となるであろう」と述べたという。[6] 中

華電影の反逆者代表に擬せられてしまった劉吶鷗は，たとえ生きて1945年を迎えたとしても「漢奸裁判」による断罪を免れることはできなかったと言うべきであろう。

一体に，すでに歴史によって断罪された人物を再評価あるいは再検討するとはどのような営みなのであろうか。歴史のパラダイムが移行し，歴史的評価そのものを見直す，あるいは評価を逆転させうる条件と可能性が生まれる場合がひとつにはあろう。かつての価値観，歴史観が誤っていたのであれば，それに基づいて個人にかけられた汚名も雪がれねばならず，名誉は回復されなければならない。だが，今一つそのような明確な評価の逆転を期するのではなくても，人間の関与した歴史を多面的かつ具体的に再構成することによってより時代の客観的な全体像に迫り，そこから現在を生きるための教訓をより豊かに引き出すことを目指して見直されるべき歴史というものがあるだろうと思われる。人は願わくば教条的な歴史ではなく，より人間的な歴史に目を開いて生きたいと思う。おそらく，日本帝国主義の中国侵略を是とする立場にでも立たない限り，今後も汪精衛政権の存在意義について歴史的評価が覆ることはないであろう。しかしそのことで汪政権の文化運動を担った劉吶鷗の人生の航跡がまったく意義なきものに帰するわけではない。吶鷗が芸術の分野で成し遂げた仕事を通してのみならず，誤りとされる政治的言説や判断を通しても，私たちはかの時代へ深切な理解を及ぼすことができるし，そこから現在への啓示を受け取ることができるはずである。

中国に留学したり一時渡航したりして文学に携わった人々の，台湾文学史の上での位置づけは，従来は中国近現代文学の受容や交流という文脈でなされてきたと思われる。例えば葉石濤氏の『台湾文学史[7]』では1910年代から20年代にかけて，中国の五四白話文学運動に「影響を受けた作家」として黄呈聡，黄朝琴，張我軍らをあげている。許俊雅氏の著した『台湾文学論―従現代到当代[8]』は「戦前の中国経験」という項目を建てて張深切，王詩琅，朱點人などに触れるが，いずれも中国文化の受容者或いは西欧の侵入によって混迷し腐敗する中国の観察批評者として叙述している。劉吶鷗についても，その芸術は租界における中国人の状況を上海のダンス・ホールや都市文化の面から紹介し，歪んだ人間性の虚偽を描き出して，文化批判を含むものとなっていると評価するが，劉吶鷗は「幼い頃を台湾で過ごしただけで，大部分の時間は日本，上海にいたので，作品には台湾意識がほとんどない。そのためここでは深くは論じない」として事実上，台湾文学史の文脈からは外している。

これに対して許秦蓁氏らは逆に，劉吶鷗が国家・民族を超えて理想を求めたコスモポリタンであったが，また一方で南国（台湾）を帰るべき家と想い定めてもいたことを強調する。劉吶鷗には確かに自己存在の不安定性がたえず付きまとっていた。親しい知人からも台湾人，日本人，上海人の国籍を分け持っていると思われ，特に上海では植民地台湾の出身であることを公言しにくい雰囲気もあって，しばしば自己を福州人と名乗って出身を糊塗するなど，国家・民族アイデンティティに対する便宜的な自己瞞着が，吶鷗においては日常的に存在したことは否みがたい。しかし今度の日記にはしばしば故郷台湾を回憶し哀惜する言説も見られ，「南国」に対する「深く熱い感情を劉吶鷗は喪失してしまったわけではない」というのである。

また許秦蓁氏は，劉吶鷗は文学では彼が紹介した「新感覚」が，また映画では「軟性映画」論が当時の主流イデオロギーから厳しく論難されるなど，その一生の行跡には「周縁性」と「独立独行」の態勢が見られるとする。それにも拘らず劉吶鷗は当時日本で隆盛であった新感覚思潮を

小説の創作と翻訳を通じて，しかもそれらを自ら書店を興し出版することによって上海文壇の作家や仲介者に引き合わせ，現代派を，文壇をリードする文学流派へと展開させていったことを強調する。[9)]

つまり許秦蓁氏は，従来のような中国文学の受容者，故郷喪失のコスモポリタンではなく，一方で自らの根，郷への愛着を自覚しながら，新しい文化を身に纏った移民者として越境し，上海の芸術文化の創造と展開に深く関与するディアスポラ的文化創造者のイメージを劉吶鷗に重ねようとしているのである。確かに劉吶鷗は大正末から昭和初期にいたる日本において，現代資本主義の容易には回避しがたい矛盾を淵源とする刹那的な恍惚，荒誕，糜爛の情調を「時代の色彩と空気」として感じ取り，それらを表現する文学言説を上海に持ち込んで文学の転回を促した。そこにこそディアスポラ“新感覚派”劉吶鷗の固有空間が存在したといえよう。島嶼国家，海洋国家という地政学的位置にある台湾の文学史に，海を超えて流出・流入するディアスポラを適切に位置づけることは，その文学史をより開放的な体系として構想することを可能にするであろう。

⑵　現代派文学の形成から展開にいたる画期としての1927年

此度の劉吶鷗全集は，20年代から30年代にかけて活躍した現代派文学の分野では施蟄存の仕事が通覧可能な形でまとめられているが，[10)]それに続く完整した個人全集といえる。特に作家の日常生活を作為なく綴る日記の公刊ははじめてであり，上海における現代派文学の形成から展開にいたるターニング・ポイントでの文学活動の再現として極めて興味深い。当時の現代派の動向についてはすでに施蟄存がいくつかの回想で振り返っているが，かれらの文学観及び人脈形成の側面からはなお文学史的に詳らかにされるべき事柄が存在する。

先ず新しい文学論の移入について，施蟄存は次のように述べていた。

「劉吶鷗は日本で出版された文芸新書を沢山持ってきた。その中には，日本の文壇の新しい傾向の作品，例えば横光利一，川端康成，谷崎潤一郎等の小説，文学史，文芸理論分野のもの，すなわち未来派，表現派，超現実派に関するものや，史的唯物論の観点を応用した文芸理論の著作と新聞があった。日本の文芸界では，五光十色のあらゆる文芸新流派は，反伝統でありさえすればすべて新興文学であるらしかった。劉吶鷗はフリーチェの『文芸社会学』を推奨していたが，かれが最も好んだのはむしろ大都会の色情生活を描いた作品であった。かれにあっては，そこに矛盾があるとは感じられていなかった。というのは，日本の文芸界について言えば“新興”であるものはすべて“異端”であったから。共通しているのは創作方法あるいは批評の基準において新機軸を出していることであって，各々の思想的傾向と社会的意味には相違があった。劉吶鷗のこうした観点はわれわれにも影響がなくはなかったのであって，われわれの文芸に対する認識を非常に混沌たるものにした。[11)]」

こうした当時の状況をより深く理解する上で，劉吶鷗日記は非常に重要な具体的情報をもたらしてくれたといえる。

また現代派人脈の形成については，施蟄存は次のように述べていた。

「（4.12クーデタ後の……斎藤注）およそ七，八カ月の寂しい隠遁生活にいささか嫌気がさした望舒は，北京に遊びに行く決断を下した。彼は私と杜衡にも同行させようとしたが，私は松江聯合中学の準備をしていたので抜けられなかった。杜衡は形勢が緩和されるのを待って杭州に戻ろう

と考えていて，北京には行く気がなかった。結局，望舒は一人で北京に行った。

望舒は北京に親戚も友人もなく，一人で小さなアパートに住んだが，数日遊ぶとすぐに寂しくなった。もともと北京大学か中法大学に入ろうと考えていたのだが，北京の情況もよくないのを見て，そういう考えを捨てた。そのころ彼は作品を書き始めたばかりの文学青年たちと知り合っていた。手紙をくれるたびに，いつも何人かの新しい友人の名前が書かれてあった。その中に姚蓬子，馮至，魏金枝，沈従文，馮雪峰などがいた。莽原，沈鐘両グループのメンバーとはほとんど顔見知りとなっていた。丁冰之（丁玲）は上海大学の同窓でもともと知り合いであった。今回北京で再会し，彼女を通じて胡也頻と知り合いになった。

望舒は北京に二カ月ばかりいて，それから戻ってきた。まず杭州の家に数日間とまり，退屈に思って，また松江にやってきたのである。それからは，馮雪峰の望舒に宛てた手紙が頻繁に我が家に来るようになった。それで私は望舒の新しい友人たちのなかでは，馮雪峰が一番彼と親しいのだと思った。[11)]」

27年から28年にかけて，上記の作家・詩人たちのほとんどが相次いで来滬し，『現代』派グループの人脈が緩やかに形成されていく。その意味で戴望舒の北京行は文学史的には重要な出来事であるが，これまでは施蟄存の上記の証言などもあって，ほぼ戴望舒の単独行であると考えられてきた。しかし後にやや詳しく見るように，『劉呐鷗日記』は，この間の経緯に劉呐鷗自身が深く関っており，従って現代派グループの形成にも大きな役割を果たしていたことを明らかにしている。

〔三〕『日記集』から見る劉呐鷗の1927年

⑴ 劉呐鷗――その生い立ちと時代と

劉呐鷗日記を文学史的な関心から読む場合には，上述したようにそのポイントはいくつかに絞られるのであるが，日記が明らかにしたものは勿論それだけにはとどまらない。日記の私的で日常的な性格から当然のこととして，親，妻子，兄弟などの家族，親族，友人に関する叙述が多くを占め，そこから劉呐鷗の家庭環境と，そこでの生活の様子，交遊関係などが浮かび上がる。また，1920年に15歳で留学のために内地に渡った劉呐鷗にとって，東京は日本文学と西欧翻訳文学及び英語を通じて初めて近代文学についてまとまった知識や観念を与えられた地であり，それに続く27年の日記に記された多岐にわたる文学的観想と覚え書きは，東京時代に培った彼の文学的な修養と志向を集約的に示していて興味深いものがある。さらに27年という年は特に上海において蒋介石による権力独占のためのクーデタが起こるなど激動の年であったし，日本でも金融恐慌が発生し中国大陸に対する政治軍事的関心が高まっていく年である。そうした事々は日記の叙述の至る所に反映されており，従って27年という時代情況の中に日記を置いて読むという姿勢も要請されるであろうと思われる。

そうした読み込みのための前提として，劉呐鷗の略歴と，27年の中国と日本を，呐鷗が特に日記で関心を示している事件を中心にして振り返っておきたい。

劉呐鷗は1905年台南県査畝營（今の柳營郷）に生まれる。本名，劉燦波。18年，台南長老教中

学に入学。20年には長老教中学を退学して，留学のため渡日，青山学院中等部三年次に編入する。22年には同校高等部英文科に入学。この年，従姉の黄素貞と結婚。26年，青山学院高等部を卒業，上海震旦大学法文特別班に編入し，フランス語，フランス文学の勉強を始めるが，ここで戴望舒，施蟄存，杜衡らの文学仲間と相識ることになる。28年に戴・施・杜らと文学同人誌『無軌列車』を創刊，29年，『無軌列車』が発禁になると，水沫書店を興して雑誌『新文芸』を創刊，30年には小説集『都市風景線』を出版する。こうした活動の資金はほとんど呐鷗自身が拠出していた。33年，「何日君再来」の作詞でも有名な黄嘉謨と映画雑誌『現代電影』を合同編集，この頃から日本の映画人との交流も始まる。35年に脚本『永遠的微笑』を書き上げ，37年には映画化され上映，評判を取る。39年，黄天始，穆時英と共に「中華電影股份有限公司」に参加。40年６月28日，「国民新聞社」社長の任にあった穆時英が暗殺される。その後を継いで呐鷗が社長に就任。その後ほどなく，９月３日，上海京華酒店で暗殺される。

また1927年という年について振り返れば，中国では前年の７月に開始された北伐が，27年１月の武漢での国民政府樹立を経て，３月には南京，上海に到り，南京では列国領事館襲撃事件も発生する。４月，蒋介石は上海で「清党」を開始，７月には武漢政府が崩壊して，第一次国共合作が終わる。８月には中国共産党が南昌で武装蜂起，北京では張作霖がソ連大使館を捜索する等，反共政策を強める。そして翌28年蒋介石は第二次北伐開始，これに干渉した日本軍との間で軍事衝突（済南事件）がおこる。日本は第三次山東出兵を行ない，６月には関東軍が張作霖を爆殺するなど，中国に対する軍事干渉を強めていった。

日本では，27年の春以降，金融恐慌が発生し，政府は三週間の支払猶予を実施。５月，対支非干渉運動全国同盟第一回会議が行なわれたことを劉呐鷗日記も記している。６月には東方会議が開催され，「対支政策綱領」が発表される。

文化面では，前年26年の12月に改造社が『現代日本文学全集』の刊行を開始する。いわゆる「円本時代」の始まりである。また27年７月には岩波文庫も刊行を開始する。３月に「河童」を発表した芥川龍之介が７月24日自殺，呐鷗は芥川の自殺に強い関心を示している。６月に青野季吉ら労農芸術家連盟を結成，28年３月には全日本無産者芸術連盟（ナップ）が結成されプロレタリア文学が盛んになる。

劉呐鷗は，27年の１月から４月までは上海に滞在し，震旦大学でフランス語を学ぶ傍ら，毎夜のようにダンス・ホールに繰り出して「浪漫生活」を謳歌している。[12] ４月12日，「清党」の混乱の最中，祖母の葬儀のために台南に帰省。５月26日，渡日し東京の洗足に落ち着き，神田のアテネ・フランセで仏語の上級クラスに入ってフランス語の勉強を続ける。その後，上海在住の知友の慫慂もあり，９月10日に上海に戻り，28日には戴望舒と共に北京に向け出発，10月２日に北京到着後，中法大学などで聴講する傍ら，北京の青年文学人士と親交を結び，政情不安な中ではあったが，なお京師の観光を楽しんで12月６日に上海に戻っている。

⑵　劉呐鷗日記から見えてくるもの
劉呐鷗の日常生活を取り巻く人々

日記に登場する人物のうち，最も多いのはやはり，兄弟，友人などの身近な人々である。（「人名・事項索引」参照）その中で，蔡愛義，蔡愛仁，蔡愛禮の三兄弟は同郷の友人であるが，いずれ

も台南長老教中学から青山学院という，劉吶鷗と同じコースを歩んでいる。三弟愛禮は吶鷗と長老教中学，青山学院の同級生で，27年当時は上海の聖約翰（セントジョージア）大学高中部で学んでいた。連れだってカールトン（戯劇院）に観劇に行くなど一緒に出歩くことも多く，離れているときでも手紙，電報の遣り取りは頻繁である。

陳文彬（清金）は高雄出身で，27年当時上海におり，その後東京に来て法政大学に学ぶ。吶鷗はよく文彬のところで「飯を食って」いる。陳瑞明も吶鷗の友人であり，画家の劉啓祥の姉の夫でもある。27年当時は東京中野に住み，明治大学か或いは法政大学に学んでいたものと思われる。６月１日の頁に「丸善で偶然瑞明に会う。一緒に東興楼で軽い食事。中華青年会館に『日本出兵反対国民大会』とある。日本の国民党はほとんど武漢派で，「武漢政府擁護」の文字もみえる。南京政府なのではない。瑞明と別れて５時15分からの高等科の授業に向かう。」とある。

吶鷗の母親は陳恨という。夫・劉永耀が早くに亡くなって（17年）以降，大家を切り盛りしながら，三人の子を育て，日本，中国に遊学させている。祖母の葬儀が済んで，吶鷗の弟の劉櫻津が東京に戻るのを見送った後，息子を送る悲しみに耐えかねてベッドに泣き崩れる姿に日記は暖かい眼差しを注いでいて印象的である。

弟の劉櫻津（阿津）は1909年生まれ，病気のため41年，31歳の若さで没している。25年から27年にかけて青山学院中等学部，27年に上智大学独文科入学，33年に卒業している。吶鷗とは手紙の遣り取りも極めて頻繁で，３月には上海に吶鷗を訪ねている。兄弟仲の頗る良かったことが窺われる。劉瓊瑛（1910～？）は妹である。５月11日に東京に着いた吶鷗を品川駅に出迎えている。この時にはすでに葉廷珪と結婚して巣鴨に住み，上野の高等女学校に通っていたものと思われる。久しぶりに阿瓊を訪ねたらピアノの練習をしていたので少し驚いたとか，一緒に大久保で Lya De Putti の映画を見たことなどが記されている。妹とも仲は良かったといえる。

林澄水，林澄藻，林澄沐の三兄弟も同郷の友人である。いずれも台南長老教中学で学ぶ。澄藻は後に青山学院へ，澄沐は同志社大学中等部に進んだ[13]。澄水は27年当時，上海に居住し吶鷗との往来は非常に頻繁であった。

丘瑞曲は上海商学院の学生で，巻末「知友一覧」によれば吶鷗とは室友という。学習机を一緒に買いに行ったり，天津館に五加皮を飲みに行ったりしている。翁鐘五，翁博村兄弟のうち兄の鐘五は吶鷗の鹽水港公学校の上級生で，弟の博村は長老教中学で吶鷗の後輩である。卒業後，27年には上海の持志大学で勉強をしていた。吶鷗の台湾の実家からの，お金が必要かどうかを問い合わせる電報が，博村に宛て打たれていたりする。親密な友人だった。周詩濱は櫻津，瓊瑛の新營公学校の後輩で，25年以降，東京に留学しており，吶鷗の東京滞在時には頻繁に行き来している。

吶鷗の身近な繋累，友人の中には，20年代から30年代にかけて台湾の文壇で一定の活躍をした人々も含まれている。先の陳瑞明はこの時すでに『台湾青年』に「日用文鼓吹論」等を発表していて，中国の五四文化運動に倣って台湾にも新文学の創出さるべきことを主張していた。黄朝琴は鹽水港公学校の先輩である。彼も23年『台湾』誌上に「漢文改革論」を発表して，日本語を使用するのではなく，古文も棄てて，白話で手紙を書き，語ることを推奨していた。後にアメリカに留学して，戦後まもなく台湾に帰って台北市長を務めている[14]。その弟・郭建英は後に吶鷗の文学仲間になる。

台南長老教中学校から青山学院への留学の流れと劉吶鷗

こうして見てくると，劉吶鷗の周囲には日本の学校への留学経験者が非常に多く，とりわけ青山学院への留学者が目立つ。しかも吶鷗も含めて，彼等はほとんど台南長老教中学を中退して青山学院へ編入するというコースを歩んでいる。今，吶鷗の周囲から青山学院への留学者を列挙すれば次のようになる（※は台南長老教中学出身者）。劉櫻津※(25-27)，劉啓祥（24-28)，林澄藻※(19-21)，郭国基※(17-19)，蔡愛仁※(16-21)，蔡愛義※(？-21)，蔡愛禮※(？-23)，周詩濱（？-?)。このほかに23年には張深切が青山学院を中退している。

台南長老教中学と同志社との関係については，すでに阪口直樹氏の研究[13]があり，長老教中学の沿革についても該書に詳しい。ただここからは，長老教中学から内地への留学ルートとしては関西の同志社とともに東京の青山学院へという流れが存在していたことが窺われる。『影像集』付録の「劉吶鷗藝文繫年」によれば，1912年に萬華營という人物が第三代長老教中学校長に就任してから強力に日本語教育を推進したとあり，このあたりが，日本への留学の流れを形作る起点になっているかと思われる。

青山学院校友会の同窓会名簿である「青山学院中学部・高等部（男子)・男子高等部合同同窓会名簿」を見ると，大正10年から14年の頁では，林澄藻（大正10年中学部)，蔡愛仁（大正11年中学部４年修了)，劉燦波すなわち劉吶鷗（大正12年中学部）の名前を見いだすことができる。そのほかに名簿には大正10年から数年の限られた期間であるが，台湾，中国，朝鮮からの留学生と思しき氏名がかなり多く散見されることが特徴である[15]。

『影像集』によれば，吶鷗は青山学院における台湾人留学生の同郷会活動に参加していたとみられ，「青山学院華臺會創立撮影」(1921年）と題する写真にも，吶鷗の姿が認められる。前列中央には石坂正信青山学院第三代院長が座っていて，この華臺會が学院によって公認された組織であることを窺わせる。日記６月７日の頁に，「午後三時，長中校友会東京支部に出席す。多くの旧知の人々に会う。しかし多少なりとインタレステングな人物にはお目にかかれない」と記していて，長老教中学の校友会東京支部も存在していたことが確認できる。

また，劉吶鷗が青山学院に在学していた23年には，関東大震災（23.9.1）が発生している。

「秋九月一日，第二学期の開始も旬日に迫った日の正午近く，俄然として関東一帯の大地は震った。始め上下に揺り，次いで左右に動きその間五分，大都の建物の瓦は飛び，柱は唸り，軒は傾き大廈も高楼も須臾にして破壊しつくされた。わが青山学院の主な建物も大破してしまった。」(『青山学報』第23号)

学院は「青山学院震災救護団」を組織，校庭や倒壊を免れた校舎を開放して数千人の被災者の保護，救護にあたったという。

「なお，ここに加えておくべきことは，青山学院が行なった朝鮮人の収容・保護である。余震続き大火燃えさかり，この世の終わりを思わすばかりの混乱状態の中に，大地震の翌日（九月二日）から朝鮮人や社会主義者が暴動を企てて放火を行なっているという流言がとび，極度の不安に戦慄していた市民の一部は，ことの正否を考えることもなく「自警団」を組織して朝鮮人を見つけると逮捕・暴行あるいは殺戮に及んだ。この犠牲になった朝鮮人は三千人に達したといわれるが，青山学院は神学部を中心として，この事実無根のデマの犠牲から朝鮮人を救うことに努力した。幸いにも神学部寄宿舎は破壊をまぬがれていたので，当時在舎の学生は早速活動を始め，

まず二十四名の朝鮮人を収容し夜は一同夜警を行ない，朝鮮人五十名を収容した。……」（『青山学院百年史』）

震災に際して学院が救護団を立上げる前に，学生たちは自主的に救護活動を開始したという。朝鮮人の保護・収容もまた学生たちの自主的な活動から始まったことであった。それにしても，「自警団」は「鮮人」と思しき者に対して，日本語を発語させ発音とイントネーションから決めつけて暴行，殺戮に及んだという。そのため在京の中国人にも少なからぬ犠牲者の出たこの恐怖の時間を，朝鮮人ならぬ台湾人の吶鷗は，青山学院にあってどのように過ごしたのか，また何を考えていたのであろうか，極めて興味深いことである。おそらく国籍や民族の区別が時に人の命も奪う暴力的な制度であることを，劉吶鷗は痛切に実感したのではないだろうか。また震災に逢ったことによって，吶鷗の青山学院での後半の三年間は粗末な簡易校舎で不便を託ちながらの勉学生活を余儀なくされたことになる。

モダン・ボーイ劉吶鷗の放蕩と“恋”

上海でもまた東京にあっても，劉吶鷗は時代の先端を行くモダン・ボーイであった。ダンスの腕前は自他共に認めるところであったし，いつも流行の背広を身につけていた。上海では日本人ホステスのいる「ブルーバード（BB）」「PP」等のダンス・ホール，東京や移動で立ち寄る大阪などでも同様のダンス・ホールに頻繁に出入りしている。日記にしばしば登場する百合子（リリー・Lily）や千代子，一枝あるいはMiss劉やMiss胡らはすべてこうしたクラブやダンス・ホールの女性である。特に百合子とは恋愛感情をともなった親密な交際をしていたが後に別れることになった。

劉吶鷗の読書と映画鑑賞

日記からは，劉吶鷗の読書と鑑賞した映画の傾向を読み取ることができる（拙著「人名・事項索引」参照）。読書はやはり文芸書が中心であり，映画は，日本映画，ハリウッド映画，ヨーロッパ映画と幅広く観ているが，特にドイツ映画に高い評価をあたえている。日本の雑誌では「改造」「中央公論」「文藝春秋」に比較的よく眼を通している。中国の雑誌では「創造月刊」をよく読んでおり，しかも「小説月報」より良いと評している（7／1）。五四文学の本流を継承する「小説月報」よりも，創造社の留学帰りの文学者たちが「革命文学」を盛んに論じる「創造月刊」を面白いと評するところに，劉吶鷗の当時の嗜好や時代の空気を感じることができよう。また西欧文学では，「モーパッサンの『脂の塊り』，とても良い短編だ。思想，技巧，形式すべてウィウィド。娼婦―善良な―を人の犠牲になるように描きながら，むしろ人の蔑視に反対しているのである。」（8／29）と記すように，モーパッサンとポール・モランを高く評価している。

劉吶鷗と中国・日本の作家たち

現代派の文学者の中では戴望舒との付き合いが最も深いといえる。ただ，「今日はなにも無聊を感じない。たぶん睡眠が十分だからだろうか。戴君と相談がしたくて心が急ぐ。少し緊張しているのだ。戴君たちが国民党に加入しているということで，三人とも学校を除籍になった。今は天文台路で部屋を借りて住んでいるという」（1／3）のように，「戴君們」と複数で出てくること

も多い。当時，比較的活発に政治活動をしていたのは戴望舒，施蟄存，杜衡の三人であって，4.12クーデタ前後において，吶鷗は三人から政治活動の詳しいことは知らされてなく，この面ではむしろ三人と距離があったことを窺わせる。ともに大学の同級生であり文学を語り合う仲間でありながら政治活動は共にしないという関係が，吶鷗の判断で成り立ったものかそれとも戴ら三人の配慮か，いずれにしてもそこに台湾人である劉吶鷗の国籍・民族問題が横たわっていることは想像に難くない。

北京行きに関わっては，次のような記述が認められる。

「施君から返信。現在，松江で中学校教員をしており，上海には来ないとのこと。戴君はまだフランスには行っていない。頻りに私の所に遊びに来たがっている。」(9／15)

「戴君の松江からの速達。今晩，私の所に来るという。彼は北京へ行こうとしている。」(9／23)

「朝早く起きて，八時半に黄浦江の埠頭へ。丘君はすでに来ている。戴君もいる。まだ他に二三人私の知らない友人もいる。」(9／24)

「朝，戴君が来て少しの間腰を下ろす。一緒に日本書店へ行って，谷崎の仏語訳を探すが，ない。棋盤街で布を買う。路上で，二十八日の船で彼らと一緒に北京に行くことに決める」(9／25)

９月24日は友人の許設がフランスに旅立つのを見送りに来たのである。23日に上海に出てきてから戴望舒は毎日のように劉吶鷗の許を訪れて話し込んでいる。25日は夜に母親と妹の阿津に手紙を書いており，阿津には北京行きを伝えている。27日はダンスホールで百合子らと別れの宴を張り，翌28日午後には松江からわざわざ見送りに来た施蟄存らが一足先に去った後，威海衛に向けて出航する船に乗ることになる。こうした叙述からは，戴望舒に慫慂されて，多分に他律的にかつ倉卒の間に北京行きを決める吶鷗の様子が窺われる。

日記には施蟄存もしばしば登場するが，原稿や出版に関する遣り取りが多い。個人的な付き合いは戴望舒ほどには親密でなかったようである。

北京へ行って最も親しくなる人物のひとりは馮雪峰であると判断される。

「馮君は日本語は話せないが，しかし沢山の日本語の著作を翻訳しており，すべて正確な訳である。かれは西欧語ができない。」(10／7)

これ以降，雪峰に日本語を教えたり（10／9），望舒と三人で北京の芸者屋に繰り出したり(11／17）して付き合いを深めている。こうして翌年早々に馮雪峰は上海にやってきて，文学活動を共にすることになる。

「夜，馮老，戴老と三人で来順で飲む。シ‐ウァン（西安）羊酒を喰らい大いに酔って帰る(略)。…戴老は二十号の女性とその amant？胡也頻に会いに行った。なにもかもちゃんとやって，十二時過ぎにやっと眠りにつく。」(12／2)

翌12月３日午前９時15分の列車で，馮雪峰らの見送りを受けて，北京を後にしているので，「なにもかもちゃんとやって」というのは旅支度のことを指している。ところで胡也頻が日記に登場するのは，この頁が唯一である。戴望舒が会いに行った「二十号の女性」は当然丁玲であり，彼らは上海大学時代からの知り合いであるが，吶鷗は丁玲，胡也頻とは北京で初めて会っているはずである。この頃には戴・劉ともに北京での活動の目的を，北京の若い作家たちと連絡をつけ

ることに絞っていたらしく，馮元君，沈尹默（10／6）等も含めて，それが順調にいっていることを窺わせる。

呐鷗は「創造月報」の熱心な読者であったが，創造社の中では郁達夫に文学的な親近感を感じていたようであり，「創造月報」１期から５期を読んで次のように記している。

「今日は，郁達夫の小説，雑記類を読んだだけ。材料はみな私事である。『過去』が一番良かった。中国の二つの新しい女性を描いている。表現には難解なところもあるが，文章には潤いがある。彼は詩人的な資質に富んだ小説家である。」（5／9）

「『小説月報』第二号が来る。ひどいものだ。中国の文人はもう絶えようとしている。……それに比べれば『創造月刊』のものはとても良い。張資平の「苔莉」，郁達夫の「過去」など。」（7／1）

黄嘉謨は，33年に劉呐鷗と『現代電影』を創刊するなど，30年代に入って後，呐鷗と映画の分野で一緒に仕事をする仲間になる人物である。９月22日，28日の頁に，

「盛京丸からはまだ電報は来ない。海岸の公園で九時まで待つ。黄君嘉謨と據毒会へ行き，暫く腰を下ろす。大中華へ行って朝食に点心を食べてから，また黄浦江の税関に行ってみると Seikio Maru 8：55″ とある。もうとっくに戻ってきているのだ。……」（9／22）

「黄嘉謨君は據毒会から百元持ってきてくれた」（9／28）

22日は知人の出迎えに，28日は呐鷗たちの見送りに来てくれた黄嘉謨に触れている。巻末の「知友一覧」によると，一時期，呐鷗と黄嘉謨，丘瑞曲の三人は一緒に住んでいたことがあり，親しい付き合いをしていたことが窺われる。

黄天始，黄天佐兄弟は後に明星公司，藝華影業公司にともに参加して呐鷗にも影響を与えることになるのだが，「大小黄と三人で戈爾登（カールトン）へ二回目の matine を見に行く。夕ご飯は華安 Bil CUA's Caf で。私が奢る。」（12／16）と見え，この段階では気の置けない遊び友達といった風情である。

日本人作家では芥川龍之介に対する関心が非常に高いことが窺われる。７月に芥川が自殺して，新聞が大きく報道し，文芸誌も特集を組むなどして社会的な関心を呼んでいたことも一因であろう。

「睡眠不足で神経がささくれ立っている時に，さらに大きな刺激を受けた。芥川龍之介が自殺したではないか。何通かの遺書を残し，「或る旧友へ送る手紙（ママ）」（「或旧友へ送る手記」）などを書いて。彼は神経を悪魔に縛られた不幸者と言わねばならない。人間は愚かなものと決まっているのだから，莫大な脳力を当てになどしてはならないのだ。神経の鋭い末端は狂奔への大道に通じている。」

これが，芥川の自殺の報道に接した，７月25日朝の反応である。強い驚きとショックで興奮している様子が伝わってくる。この後も次のように何度か芥川に言及している。

「芥川氏の「南京の基督」を読む。とても良い。芥川氏の自殺は芥川氏，菊池氏，三宅やす子氏の三角関係によるという。」（8／21）

「……また，芥川氏の「沙羅の花」「藪の中」「羅生門」「南京の基督」を読む。どれもとても良い。特に小品「屋生（里）的信（ママ）」（「屋生の信」）「東洋の秋」「沼」などはどれも珠玉である。「南国の美人」はかつて彼が中国で読んだ（ママ）（綴った―斎藤注）妙文であって，その慧眼には共感のあまり

読者にポンと卓を叩かせるものがある。」(8 / 23)

「日がな一日，『文藝春秋』九月号，芥川龍之介追悼号を読む。」(8 / 26)

上海に帰ってからも，眠れない夜などに芥川の死が脳裏に蘇ることがあるとも記している(12 / 11)。

菊池寛，谷崎潤一郎，佐藤春夫にもしばしば肯定的に言及している。堀口大学の翻訳と評論にも多くを負っている。ポール・モランの「夜ひらく」「夜とじる」は最初は大学の訳で読んでいるのである。以下に日記の関係部分を引用しておきたい。

「久米正雄の「マギー」と菊池寛の「蠣フライ」はともに作者の鋭敏さを示している。」(1 / 10)

「谷崎潤一郎の「日本に於けるクリツプン事件」は小説らしくないがインタレストと云う点では他の追随を許さない。インタレストは確かにストウリーの一要素である。」(1 / 10)

「『新潮』を読む。片岡氏の「金銭について」，新居氏の谷崎論，大学氏の「スペインの夜」いずれもとても興味深い。」(6 / 9)

「谷崎氏の劇論は本当に面白い。饒舌ではなくて利舌である。」(11 / 14)

「春夫氏の「悪魔の玩具」も明快なものである。」(3 / 31)

「春夫氏の「人間事」はさらに面白い」(11 / 5)

かつて施蟄存は，27年に日本からやってきた劉吶鷗が最も傾倒していたのは芥川と谷崎だったと，筆者に語ったことがある。そして特に谷崎への傾倒は戴望舒や施蟄存にも伝染していったのである。理知的な芥川と耽美的な谷崎と称されるが，いずれもおそらく劉吶鷗が憧憬していた文学境地であったと思われる。さらに日記からは谷崎の戯劇論としての『饒舌論』に注目していることも読み取れる。

新感覚派では横光利一に言及している。

「横光利一の「皮膚」は「春は馬車に乗って」に比べて，その中にあるものは遙かに良い。内容，スチールはともに最高に感覚的であり，景物の high light な点出は彼の描写である。北京をこのように描いてみたらきっと面白いであろう。」(11 / 4)

しかし劉吶鷗が横光に触れているのは，27年の日記に関する限り，この一カ所にとどまる。一般に劉吶鷗らへの日本の新感覚派の影響がしばしば指摘されるが，よく知られているように，中国に「新感覚派」という評語が持ち込まれるのは，31年，楼適夷が施蟄存の文学を「新感覚主義」と批評したことに始まるのであって，そのように批評される以前も，それ以後も，上海の現代派は「新感覚派」だけに傾倒していたわけではない。現代派の日本文学への関心や影響関係は今少し広い視野から捉えられる必要があろう。

1927年の政治情勢と劉吶鷗

26年の北伐開始以降の政治軍事情勢，わけても北伐軍が上海に到達し，蒋介石による「清党」と呼ばれる反共クーデタが始まる前後の情勢を，劉吶鷗が上海にいてどのように記しているのかは，吶鷗の情勢認識，政治思想観を見る上で重要な鍵である。詳細かつ周到な分析が必要と考えるが，その用意がないので，今は彭小妍氏の的確な概括に従っておきたい。

「1927は国民党の清党の一年であり，上海も当時の中国全土と同様に平穏ではなかった。吶鷗

の日記には到るところに兵乱とストライキの跡を読み取ることができる。２月19日「杭州陥落，孫軍は松江に退却」，「南軍はすでに上海に到達」それに「上海ゼネスト」，３月21日「阿瑞のあたりで便衣隊と外国兵が衝突」，３月27日「租界の中も交通遮断」，４月３日「西藏路で英国兵に身体検査をされる」，４月６日「甘肅路で英国兵の守備隊に遇う」，４月９日「日本軍に検査される」等々である。こうした「動揺する上海の空気」は人々の恐れを引き起こし，さらに生活上の具体的な不便を発生させていた。しかし無力な庶民にどうすることが出来たであろう。呐鷗の対処の仕方はひたすらその場凌ぎに徹してやり過ごすし，苦中に楽しみを求めることであった。これは概ね当時の大多数の上海人の生活態度でもあったであろう。呐鷗の日記からは1927年の上海には依然として歓楽街にネオンがきらめき音楽が鳴り響いて，目の前にある国難と奇異な対照を見せていたことが読み取れる[16)]」

劉呐鷗暗殺の顚末について

また，劉呐鷗の暗殺をめぐっても関心を喚起しておきたいことがある。確かに『影像集』において許秦蓁氏も述べるように，劉呐鷗が何故，誰によって殺されねばならなかったのか，今日でもなお謎の部分を残している。この点について中国，台湾の研究者は松崎啓次の証言にもっと注目してもよいと考える。その著書『上海人文記』は，穆時英，劉呐鷗と相次ぐ友人の暗殺を文字通り身のすぐ近くで目睹してきた者としての痛切な臨場感溢れる報告となっていると思われる。40年９月３日，劉呐鷗暗殺事件が起こった日の関連部分を以下に引用しておきたい。

「その翌々日，私は撮影所で劉君を待つて居た。彼は何時もに似合わず遅く，十一時を過ぎても現れなかつた。其の日のお昼，私達は最近製作に着手する筈の記録映画「珠江」の製作プランに就いて打ち合わせをする筈であった。其の映画を演出する石本統吉，他五名の人達が東京から遣って来て居た，そして，それに中華映画のスタッフが参加して，広東の出身である黄君兄弟にいろいろの質問をして，現地の調査をする筈であった。

十一時半，劉君から電話が掛った。本社で待って居るから，皆んに来て呉れと云うのだ。私達は二台の自動車に分乗して，租界のハミルトンハウスにある本社に急いだ。エレベーターを降りてドアーを開けると，映画検閲所の所長である蒋君と，大声で劉君は談じて居た。十二時に十分前であった。

「おい劉君，みんな，来たよ，何処で打合せをするの」

「京華，さあ，行かう」

と，彼は立ち上がった。待って居た，黄君兄弟を誘って私達は四馬路の広東料理店京華に着いた。

何故，この日劉君が京華を指定したかは誰も知る事が出来なかった。広東に就いての映画を作る際であったし，広東料理の店を選び，且つ，この店の点心を日本の人達が特別愛好する事を知って居たので，深くも考えずに彼は決めたのであらう。この店を指定したのは劉君であったし，その指定に従って行った同勢は彼を入れて十三人であった。

京華の二階の一室に席を決めると，我々は上衣を取って，ワイシャツ一枚でテーブルを囲んだ。それは未だ上海の夏が去らない九月の始めであった。我々は実に活発に質問をした。黄君はその質問に対し実に親切に答えた。その我々の激しい会話を，劉君は例の得意な語学で通訳して呉れ

た。さうしてゐる間に，もう二時になった。

オフイスの休憩時間である，十二時から二時迄の間をかうした事に利用する習慣になって居た我々は，二時が来るとサッと話を切りあげて，洋服の上衣に手を通した。椅子から立ち上がって私は劉君に云った。

「君，撮影所へ行くんだらう，一緒に行かうか」

「うん，だけど，一寸廻り道して行くから，僕は先に失敬するよ」

と，劉君は，部屋を出て廊下を階段へと急いだ。私の秘書，藩君が時計を見上げて，私に囁いた。

「貴方は二時に撮影所で約束があった筈です。もう，十分過ぎてゐますよ」

私も時計を見上げた。確かに二時十分過ぎであった。

その瞬間，私はピストルの音を四，五発聞いた。

「殺られた」「殺られた」

たしかに，二声，劉君が叫んだ。然も日本語で。その声は力がこもって普段の元気な劉君の声と少しも違わなかった。

私は駆けつけた。階段の真中に劉君は仰向けに倒れて居る。彼の右の胸には白いワイシャツを染めてボール大の大きさで血が滲んで居た，私は咄嗟に良かった，射たれたのは心臓ではないと思った。それでも出血を出来るだけ少なくしようと思って，私の両手で胸を締めつける様に抱いた。然し彼の意識を失った身体は重く。力一杯で抱き起さうとしても不可能な程であった。私は引きずる様にして階段から自動車に運んでいった。往来で印度人巡査がピストルをふりかざしながら誰かを追って行くのがチラリと見えた，犯人だなと私は咄嗟に考へたが，劉君の事を考へると，私はそれを追求する余裕は無かった。

劉君の運転手が泣きながら飛んで来た。彼と二人で血だらけになった劉君の身体を自動車の中に担ぎ込んだ。そして既に張られた非常線を突破して自動車を走らせた。

私は劉君を抱きながら，きっと，何処かから私も射たれるだらうと，今度こそは覚悟をした。然し覚悟をしながら，次第次第に青ざめて行く劉君の顔色をぢっと眺めて居た――。彼は死ぬ俺は射たれる。」

引用が非常に長くなった。昭和16年に出版された本書は，02年，大空社から『上海叢書』（全12巻）の中の一巻として復刻されている。しかし，資料的価値が高いと考えられるので敢えて煩を厭わず引用した。引用部分の後も，松崎は劉吶鷗が病院へ運び込まれた時にはほぼ絶命状態であったこと，三発の弾丸が打ち込まれ，その内一発が致命傷になっているらしいこと，死後，医師が遺体を「死屍室」に運ぼうとするのを，かつて二カ月前に穆時英がやはり死屍室に運ばれたために二日間も家族から遮られていたので，頑強に拒んで家族が来るのを待ったことなどが具体的に記されている。劉吶鷗と穆時英の横死をめぐって当事者がこのように具体的な証言をしている例は他に存在しない。手を下した者については，松崎も重慶政府サイドや金融トラブル絡みで黒社会の手にかかった可能性を並列するだけで明確な断定は避けている。しかし，松崎が描き出した現場の状況とこれまでのいくつかの証言及び文献資料を突き合わせれば，蓋然性の高いシナリオを想定することは可能であると思われる。

おわりに

歴史の出来事というのは，時を経て人々の記憶が薄れるように曖昧になっていく面もあるけれども，時間を置くとともにさまざまな観点からの考察も加わり，逆にその意味が鮮明になっていくということもあるように思われる。その意味で，歴史を考えるとは多面的な考察を重ねながら歴史を相対化する試みといえるのかも知れない。

此の度，許秦蓁というひとりの若い知性が埋もれた文化人の発掘に挑み，師友の助力を得て，このような全集を編集しえたことは台湾・日本・中国の30年代文化を跨界・跨境しつつ流動するものとして考察する上で重要な素材を提示したといえる。その貢献を高く評価しつつ以下に若干の瑕疵に触れたい。

その一つ，劉吶鷗の評価，研究については既に80年代中葉以降，中国において少なくない研究が蓄積されている。勿論そこには未だ不十分な面も存在するであろうが，しかし今少し丁寧かつ公正にそうした先行研究を評価し踏まえるべきではなかったであろうか。

また『日記』には誤読・誤記が少なくない。影印されたオリジナルを見れば，校閲に当たった黄英哲，彭小妍両氏の直面した困難と労苦は想像に難くない。しかし黄英哲氏本人の訂正が49箇所（「中国文芸研究会会報」No. 250），大阪外国語大学教授の青野繁治氏の指摘が百余箇所，立命館大学講師の張建明氏の指摘が中国語文を中心に66箇所である。形式的な合算では二百余箇所，重複を除いてもおそらく百二三十箇所は下らないと思われる。資料としての精度を高めるべくより慎重で徹底的な校閲が必要であろう。また，各種の索引もこの種の資料には必要であろう。

〔注〕

1）　松崎啓次著『上海人文記』（高山書院　昭和16年10月）に，劉吶鷗が松崎に語った言葉として見える。

2）　山口守編『講座　台湾文学』（国書刊行会　2003年３月）「編者あとがき」に拠る。

3）　劉吶鷗の日記は，当時新潮社が発売していた「新文藝日記」と称する日記帳を使って綴られている。彭小妍氏は「東京新潮社が出版した大正十六年版『新文藝日記』」と紹介しており，日記帳にも確かに「大正十六年版」と記してあるが，実際には大正16年は存在しない。大正15年12月25日に大正天皇が死去すると，直ちに年号が変わって昭和となり，短い昭和１年を経た後，1927年は昭和２年になっているので，この点の注釈は必要である。

4）『劉吶鷗全集』出版の経緯については，黄英哲著「『劉吶鷗日記』刊行経緯と正誤表について」（「中国文芸研究会会報」250号〈2002.9〉）に詳しい。

5）　漢奸裁判については益井康一著『漢奸裁判史1946-1948』（みすず書房　1977年）を参照。劉吶鷗は勿論台湾人であるが戸籍上は「日本人」であったから，仮に生きて45年を迎えたとすれば，日本人「戦犯」として裁かれた可能性も，またその上に「漢奸」としても裁かれた可能性もある。国民政府による台湾人の戦犯裁判については近年，和田英穂著「戦犯と漢奸のはざまで―中国国民政府による対日戦犯裁判で裁かれた台湾人―」（アジア政経学会「アジア研究」第49巻第４号　2003年10月）のような研究も出ている。

6）　前掲，注１）に拠る。

7）葉石涛著『台湾文学史綱』（高雄・文学界雑誌社出版　1987年２月），翻訳は中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史』（研文出版　2000年11月）。

8）許俊雅著『台湾文学論――従現代到当代』（国立編訳館主編　南天書局有限公司　1997年10月）。

9）近年の施蟄存の回想は，劉吶鷗のこのような役割を積極的に裏づけている。林祥主編，采訪人・沈建中『世紀老人的話―施蟄存卷』（遼寧教育出版社　2003年６月）参照。

10）華東師範大学出版社から出ている『施蟄存文集』「文学創作編」３巻を中心に多種のアンソロジーが編まれており，それらによって施蟄存の30年代の作家・編集者としての仕事は概ね目睹しうる。

11）施蟄存著「最後一個朋友―馮雪峰」（『新文学史料』1983年第２期，翻訳は青野繁治訳『砂の上の足跡――或る中国モダニズム作家の回想』（大阪外国語大学学術出版委員会　1999年２月）所収）参照。

12）前掲，注９）において，施蟄存は翌28年の夏休みの事としてであるが，次のように述べている。

「彼（劉吶鷗…引用者注）は私と戴望舒をよく彼の家に誘った。……三人とも毎日午前中は家で本を読んだり，翻訳をしたり，物を書いたりし，昼食後ひとしきり眠って，三時に虹口プールで泳ぎ，それから四川北路の日本人がやっている店で冷たいものを飲む。家に帰って夕食を食べた後，四川北路一帯の映画館で映画を観，さらにダンス・ホールで踊って深夜まで遊んで漸く家に帰るのである。これが当時の一日の生活であって，私の一生の内でも最も浪漫的な時期であった。」（P49）

13）阪口直樹著『戦前同志社の台湾留学生―キリスト教国際主義の源流をたどる』（白帝社　2002年５月，P31）に紹介がある。

14）前掲，注７）に拠る。

15）なお「同窓会名簿」によると大正15年中学部４年修了生として大岡昇平の名も見える。大岡昇平と劉吶鷗が相互に面識を得ていたかどうかは定かではないが，関東大震災を挟むこの時期，二人が同じキャンパスで学んでいたことは確認できる。

16）彭小妍著「導読」（『日記集』上）。

〔附記１〕　社団法人・青山学院校友会事務局長の西前敦子氏には「校友会員名簿」の関係部分の閲覧を許可していただき，『影像集』の写真の人物の特定について御教示をいただくなど有益な助力をいただきました。記して感謝いたします。

〔附記２〕　岡尾惠市先生の退任記念号に拙文が撰せられることをとても嬉しく思っています。70年代はじめ私は先生に体育実技（保健体育論も）を教わりました。当時の体育実技はローテーションで何種類ものスポーツを体験できたり，特別ルールで男女混合サッカーを楽しんだり，よく考えられ，工夫されていました。味のあるベテランの体育教師が多かった中で岡尾先生はバツグンに颯爽とした青年教員でした。青空に顔を上げて汗をふきながら，体育と語学は大学４年間あったらいいな，と思ったことです。ありがとうございました。

『劉吶鷗 日記』人名・事項索引（初稿）

〔台湾人・中国人　人名索引〕

阿　芳　11/30
安　世　5/8
蔡愛禮　1/1,2,6,13,16,20,24,29,30,31,2/1,2,9,10,13,14,15,3/3,5,10,12,25,26,4/2,8,9,11,12,17,22,26,5/1,3,17,7/12,8/16,17,24,9/3,11,12,13,15,10/11,11/8,12/13
蔡愛仁　1/1,9,19,22,29,2/2,12,13,16,22,3/2,5/17
蔡愛義　2/1,5/24,25
蔡恵馨　4/8
曹　操　11/13
岑　參　11/4
陳　恨(母)　4/21,30,5/4,5,20,23,27,7/12,14,25,10/5,11/20,12/3,13
陳萬里　1/11
陳文彬(清金)　2/3,20,27,3/7,20,22,4/9,7/18,26
陳瑞明　5/27,6/1,7/7,8,10,12,28,8/25,29,9/5,10,12,13,17,22,10/5
陳(岡山在住)　7/12
仇　英　10/22
慈　禧　10/11,22
戴望舒　1/3,4,18,21,26,28,2/4,6,8,10,15,25,3/4,7,8,13,16,4/11,12,6/13,9/15,23,24,25,27,28,10/1,3,4,6,8,10,11,13,16,24,27,30,11/7,12,15,17,19,22,24,25,27,30,12/1,2,13,17,18
定時(叔)　5/20
董其昌　10/22
范仲淹　10/11
馮雪峰　10/7,9,13,16,24,11/12,15,17,25,12/2,3,18
馮沅君　10/6,
高常侍　11/ 9
孔　子　11/11
貫大元　11/13
光緒(帝)　10/11
郭國基　9/22,25,10/23,12/6
郭沫若　6/29
郭子儀　10/11
韓世昌　11/29
韓　信　10/11
Hao 壽臣　11/13
洪炎秋　1/4,10/23,11/4,5,12/2
鴻　5/27
胡　適　9/13
胡也頻　12/2
胡(Miss)　9/19,24
黄朝琴　9/18,12/12,13,17,19,21,23,27,31
黄嘉謨　9/22,28,10/13,12/6
黄素眞(妻)　1/17,2/1,6,7/14,10/5,11/2,24,12/13
黄天始　12/10,11,13,16,19

黄天佐　12/8,9,11,16,18,25
黄　9/15
嘉　惠　12/31
江(上海市衛生部長)　9/18
蒋介石　4/28
蒋　1/13
景帝后　10/11
敬信齋　10/11
金友琴　11/10
康熙(帝)　10/11
頼生祥　3/28
老　舎　1/18
李道南　12/31
連　4/17
寥　2/9
林(先生)　6/7
林百奏　12/31
林澄藻　1/14,2/1,17,3/8,9,28,5/1,23,27,28,6/7,8,13,17,20,21,28,7/5,6,30,8/25,9/7,10/11,11/21,12/3
林澄沫　8/25
林澄水　2/3,4,9,10,12,13,16,19,20,22,24,25,27,3/6,16,26,4/4,5/17,7/12,8/16,25,9/22,23,10/5,23,31,11/15,16,12/6,7,8,17,18,23
林公堂　12/6,13
李(小姐)　6/12
李(女士)　10/18
劉青江　1/16,31,2/1,2,13,26,3/2,3,7
劉啓祥　5/28,30,6/14,16,18,10/5
劉櫻津(阿津･弟)　1/6,30,2/6,15,3/8,9,15,16,18,19,20,22,27,28,30,31,4/1,2,3,4,20,25,5/1,3,5,23,28,30,6/10,13,7/7,16,18,8/24,25,9/1,4,6,7,25,10/5,30,11/9,12/8
劉青雲　5/27,9/28
劉瓊瑛(妹)　4/30,5/23,26,29,6/25,7/5,8/25,10/5,11/2,12/13
劉(Miss)　9/19,24
陸侃如　4/29
緑　霞　11/14,15,17,18,19,21,24,27,30,12/1,8
馬連良　10/23,11/26
梅　妃　11/9
寧　3/27,31,4/6,11
寧尚南　10/19
籠　10/6,8,11/6
溥　儀　10/22
橋　子　3/4
乾隆(帝)　10/11,15
琴　湘　11/27
青　風　12/31
瓊　仙　12/25
邱　4/12

丘瑞曲　1/1,2,8,22,26,27,2/13,16,17,22,25,28,3/3,8,18,21,27,6/1,7/2,26,9/11,14,15,19,23,24,10/13,12/8
全　寶　11/15,17,19,21,22,27
肉　乾　3/4
沈　榮　4/15,18
沈尹默　10/6
實　香　6/7
施蟄存　1/18,3/7,8,10,4/10,11,12,6/10,7/2,9/10,11,15,18,22,28,11/16,12/17
蘇維霖　9/29,23,27,29,11/7,12/2
孫(先生)　1/27
孫春霆　11/5,12/3
孫中山　3/27
孫傳芳　3/14,4/28
孫　10/7
唐　10/22
唐明皇　11/9
桃　4/22
王　4/6,11,21
王國維　6/22
王卯卿　11/13
王仰中　9/13,23
汪煜庭　1/15
文徵明　10/22
翁博村　2/9,10,13,17,24,26,27,28,3/1,2,3,5,6,7,18,22,23,25,26,29,30,31,4/5,9,11,12,8/29,9/9,10,11,10/5,19,11/5,6,12/8,11,19,28
呉春霖　5/23,24
蕭(君)　2/3
新　三　11/16
徐　四　11/27,30
徐志摩　9/13
許　設　2/8,9/24
許約梅　2/25
許　10/14
楊朝華　2/12,11/2,9
楊貴妃　11/9
楊耐芳　4/3
楊慶祥　11/5
楊小樓　11/12,13
楊允中　2/1,5/10
楊贊勳　8/25,28,9/7
葉秋原　9/15,18,20,21,11/12,13,14,15,17,22,12/8
葉廷珪　5/15,20,7/5,8/25,9/15
葉　5/21
雍正(帝)　10/11
郁達夫　5/9,7/1
岳　飛　10/11

則天武后　11/9
張大元　11/11
張　飛　10/11
張　良　10/11
張明色　9/22,25
張資平　5/10,15,7/1
張(晨報執筆)　11/1
張　12/4
章謁雲　11/6
趙 玉　10/6
趙　雲　11/13
趙子昂　10/11,14,22,26
鄭正秋　11/11
趾　青　11/8
周詩濱　5/26,29,30,7/21,26,28,31,8/5,6,21,22,24
周作人(豈明)　1/20
周　10/8
鄒一桂　10/22
諸葛孔明　10/11,12

〔日本人　人名索引〕

青木正児　6/6,7/1
芥川龍之介　7/25,8/21,23,26,10/20,21,12/11
旦子　8/5,7,31,9/6
アッちゃん　2/7,3/2
池谷信三郎　8/3
石川　6/11
泉　鏡花　7/11
伊藤(青山在住)　7/26,8/2
市川左團次　9/3
井上(池尻在住)　7/18,26,27,8/11,13,14,15,24,31,9/1,3
井上紅梅　6/16
井上龍友　10/13
井上楊三　9/19,10/13,26,30
岩崎　3/24
宇野浩二　7/2
大原　6/23
大濱　7/19,8/1,8,10
大脇　1/1,6/21,7/8
小川未明　10/22
小川周明　10/21
岡澤　12/20
尾上菊五郎　9/6
梶原　1/30
一枝　1/16,28,16,3/2,10,17,9/26,27
片岡鉄平　6/9

金子(静養軒のピアニスト)　7/30
菊池寛　1/10,8/9,21,24
君子　9/11,14,17,25
木村　8/14,15
久米正雄　1/10,8/24
小杉　8/31
後藤　8/23
佐藤春夫　3/31,10/20,11/5
佐伯　6/23,27,29,8/1,2,4
櫻井　9/10,11
里見　淳　7/11
品川(医師)　2/9,10,17,3/1,2,6,20
鈴木誠一　10/13
瀬川　8/9,27
高須　5/8
武下　2/16,20,22
谷崎潤一郎　1/10,6/9,9/25,10/20,11/4
近松秋江　3/31,7/22,23
千代子　1/25,31,2/3,6,7,8,12,13,26,3/2
天流ちゃん　8/1,5
徳子(徳ちゃん)　6/30,7/17,8/5
徳田秋声　7/27
徳富蘇峰　4/2
徳富蘆花　11/4
中條中將　8/31,9/1
中野江漢　10/15
中村福助　9/6
中村　6/11
夏目　3/28,5/26,6/28,7/2,7,9,12,18,19,27,30,8/7,9,10,15,17,9/5,10/13
夏目漱石　6/24
新居　至　6/9
野間　1/13,6/9,11,12,23,7/9,10,12,16,24,9/4
秦　豐吉　4/2
林長二郎　7/2
藤代　8/1
堀口大學　6/9,10/20
正宗白鳥　1/10,9/19
松本幸四郎　9/3
三浦歌津子　1/24,2/6
三宅やす子　8/21,24
宮田　9/8,10,12/18
武者小路実篤　3/31
山田　6/18
山根　8/9
百合子(リリー・Lily)　1/2,28,29,2/3,14,16,17,18,21,22,23,25,3/4,10,14,15,17,21,22,23,28,29,4/9,11,
9/10,11,13,4,17,26,27,12/13

横光利一　11/4
吉川　1/24, 9/17
吉田　12/8
渡邊(看護婦)　2/12, 14, 17, 20, 21, 24

〔その他の外国人　人名索引〕

Barrymore　2/2
Belee Daniel　3/10
Charlie　9/23
Chikhnefzaoui　10/24
Claudel　10/3
Conrad Veidt　12/28
D'almond　10/6
ディルフィン・モーラン　10/20
Dorothy Dallion　9/23
Evil janings　5/28, 7/1
E. V. LUCAS　2/1, 7/3
ファイアット　5/29
G. Anpollinaire　11/10
Gautier　6/3, 13
Grace　12/8, 10
Hauson　10/19
Hewcody　10/16
Hieflanderlt　9/10, 11
Horthorne　9/4
Ibanez　9/4
John Cleland　11/8
Joan Crawford　9/25
Kim　12/10
Kuprin　1/5
Lya de Putti　5/28, 6/25, 9/4
Mae Murrin　9/21
Marie Laurrancent　10/25
Maurand　10/20, 21
Melle Regnies　10/6
モーパッサン　8/29
Pablo Picaso　10/25
Paul Morand　10/18
Pearle　9/11
P. Gervais　10/19
釈　迦　4/20
ヨネ・ノグチ　4/16

〔文学・映画・雑誌　索引〕

（文学（L）　映画（M）　雑誌（Z）　L は広い意味で　M には劇等も含む　Z には新聞等も含む）

愛欲(L)　3/31

脂の塊り(L)　8/29
芥川集(L)　12/4
悪魔の玩具(L)　3/31
A man's past (M)　12/28
青空に描く(L)　10/21, 24
朝日新聞(Z)　6/18, 19
嵐(L)　2/20
或阿呆の一生(L)　10/20, 21
或旧友へ送る手記(L)　7/2
Atlantic (M)　12/17
北京繁昌記(L)　10/22
北京文藝界的分門別戸(L)　6/14
北京週報(Z)　11/7
北京天津案内(L)　10/3
文芸春秋(Z)　8/26, 12/4, 27
美術新秋(L)　10/21
白虎隊(M)　7/20
晨報(Z)　11/1
創作月刊(Z)　4/5, 5/9, 10, 15, 16, 7/1
楚辭研究(L)　4/29
春的詩集(L)　2/15
中央公論(Z)　6/15, 16, 17, 9/19, 12/27
Contes d'Excelsior (L)
Curacoa (L)　5/10
大道無門(L)　7/11
Des S rails des Londres (L)　11/8
帝国美人(M)　11/25
東方雑誌(Z)　3/31, 6/22
Don Joan (M)　2/2
映畫時代(Z)　12/27
二十四史通俗演義(L)　5/8
Excelsior (Z)　6/14, 15
方言考字(L)　6/28
Fanny Hill (L)　11/8, 9, 13, 29
Faust (L)　2/15
Feuilles de Temp rature (L)　10/21
Foreigners appreciate me (L)　9/17
婦人公論(Z)　3/17, 28
劇(Z)　1/20
歌場奇縁(L)　4/3
銀座狂想曲(L)　8/3
芸術と手紙(M)　5/29
月下の一群(L)　1/19, 26
孔雀東華(M)　2/4
掛名的夫妻(L)　11/11
Halon Histoire de la Lit F Contemporaine (L)　6/14

春は馬車に乗って(L) 11/4
Hellen of Troy (M) 2/6
皮膚(L) 11/4
避暑地(L) 3/7
紅衫 (L) 3/8
I'Anthologic qreeque (L) 6/14
In Holliwood (M) 12/18
Introd (L) 11/10
人間事(L) 10/5
自由評論(L) 8/24
従軍夢(M) 9/23
巻耳集(L) 6/28, 29
次淡生活(L) 4/2
饒舌録(L) 10/20
蠣フライ(L) 1/10
改造(Z) 4/2, 16, 6/28, 10/20, 22, 11/4, 12/27
過去(L) 5/9
菊池寛戯曲集(L) 1/19
近代情痴集(L) 3/24
勤王時代(M) 7/2
金銭に就いて(L) 6/9
勾録紅(L) 7/11
黒髪(L) 7/22, 23
La Connaisance de l'est (L) 10/3
Le Jardin parfum (L) 10/24
老張的哲学(L) 1/18
聊齋志異(L) 1/10
論中国文学上的誇飾(L) 11/1
マギー(L) 1/10
魔窟(L) 1/5, 6
Melle De Maupin (L) 6/8, 13
M moires de J. Casanova (L) 11/8
元の枝へ(L) 7/27
莽原(Z) 2/1
Men of Steel (M) 1/1
Monte Carlo (M) 10/16
米人和文藝(L) 5/1
モーラン詩集(L) 10/23
Morand U (L) 4/29
夢魔(L) 1/10
無明(L) 3/31
紫頭巾(M) 7/29
南京的(の)基督(L) 8/21, 23
ナナ(L) 2/17
Nefzaoui (L) 10/27, 29, 31, 11/5
Ni belungenreich (M) 8/26

日本に於けるクリツプン事件(L)　1/10
日輪(M)　8/30
女人的鞋子(L)　4/2
音楽の十字街に立ツ(L)　1/19
Paris (M)　9/25
Passtime (M)　9/11
品花寶鑑(L)　6/13, 17
羅生門(L)　8/23
西行法師(L)　4/16
三奇人(L)　3/6
散曲究研續(L)　6/22
沙羅の花(L)　8/23
支那文藝論藪(L)　6/6, 7/1
支那家庭を説く(L)　6/16
支那の賣笑(L)　10/3, 15
支那の田舎まわり(L)　8/23
Sinners in Silk (M)　1/2
新潮(Z)　3/4, 6/9, 7/6, 8/3, 12/17
水滸傳(L)　5/10, 11, 12, 13, 14, 15
白雪遺音選(L)　6/20
将軍(L)　10/22
修善寺日記(L)　6/24
頽廃時代(L)　9/19
多情佛心(L)　4/28
苔莉(L)　5/15, 7/1
谷崎集(L)　2/15
Tess (M)　4/14
The French Doll (M)　9/21
The low of the lowless (M)　9/23
The manicure girl (M)　3/10
The Observer (Z)　6/14, 15
The Scarlet letter (M)　9/4
The Temptress (M)　9/4
東洋文藝十六講(L)　1/22, 5/8
築地小劇場(Z)　12/27
文学大綱(L)　9/13
語絲(Z)　2/1, 6/13
小説月報(L)　3/30, 7/1
西班牙的夜(L)　6/9
希文粋(仏語訳)(L)　6/24
學燈(L)　6/14, 7/1
Un beau jonr (L)　10/19
宇宙的驚異(M)　6/24
Vari t (M)　5/28
性史(L)　1/9, 10/14
藪の中(L)　8/23

1926年法国最好的短編小説(L)　4/30,5/1
楽府古辭考(L)　4/29
楽府詩集(L)　4/29
西行日記(L)　1/11
Zigzag in France (L)　2/1,7/1,3

劉吶鷗『日記集』月毎の「読書」目録

〔一月の読書〕
『ヤーマ』（クープリン，新潮社）
『西行日記』（陳萬里，北大国学社）
『月下の一群』（堀口大學）
『藤十郎の戀』（菊池寛，現代戯曲全集）
『嵐・三人・伸び支度』（島崎藤村）
〔二月の読書〕
『眼と眼・詩集』（伊藤介春,紅玉堂）
〔三月の読書〕
『近代情痴集』（谷崎潤一郎）
「彼等のモーダン振り」（宇野浩二，婦人公論四月号）
『愛慾』（武者小路実篤，新潮社）
「無明」（近松秋江，中央公論新年号）
『悪魔の玩具』（佐藤春夫）
〔四月の読書〕
「汽車で」（宇野浩二，文藝春秋四月号）
『若きエルテルの悲み』（秦豐吉譯）
『大宋宣和遺事』（黎烈文標点，商務印書館）
『多情佛心』（里見）
『樂府古辭考』（陸侃如）
『French best Short Stories of 1926』
『Monsieu U』（Paul Morand）
『The first disappearance of Bardini』
〔五月の読書〕
『The Best French Short Stories of 1926』
『東洋文藝十六講』（高須芳次郎）
『繪圖二十四史通俗演義』（新昌呂撫安世輯）
「過去」（郁達夫）
「街燈」（郁達夫）
「苔莉」（張資平）
「Curaoa」（張資平）※以上四篇『創作月刊』1・3・5・6 期
『水滸傳』
『清譚』（胡懐深）
〔六月の読書〕
『武漢三鎮遊記』（後藤朝太郎）
『伏園遊記』（伏園氏,北新）
『元の雑劇に就いて』（堀谷氏）
『品花寶鑑』
『白雪遺音撰』（華廣正）

『支那文藝論藪』（青木正児）
『修善寺日記，思い出すものなど抄』（夏目漱石）
『Anthologic qreque, les plus jolies Rosesds』
『方言字攷』（蕭山謝睿編，上海會文堂書局）
『巻耳集』（郭沫若詩経新譯）
「鬻命」（汪静之，小説月報 No．1）
「兵大伯陳振武的月譜」（李劼人，東方 No 3，4）
『語緑裡面』（廢名，豈明）

〔七月の読書〕

『Zigzags in France』（E. V. Lucas）
『大道無門』（里見淳，改造社）
『累』（宮地嘉六）
「春は馬車に乗って」（横光利一）
Apprenons danser”
Danses modernes” Contesles
『黒髪』（近松秋江）
『The Cooktail Book』
「元の枝へ」（徳田秋聲）

〔八月の読書〕

「沙羅の花」（芥川龍之介）
『中国の田舎巡り』（後藤朝太郎）
『長久の中国』
「脂の塊り」（Maupassant，世界文學全集）
『Dancing do’s and don’ts.』

〔十月の読書〕

『支那の賣笑』（中野江漢）
『福建省の一瞥』（盛叙切）
『Poeesie』（Paul Morand）
『北京繁昌記』（中野江漢）
『Cheikh Nepzaoui : Le Jardin Parfum』
『浮生六樂一閨房記六』（呉縣　沈復，清康熙）

〔十一月の読書〕

「皮膚」（横光利一，改造）
『高常侍集』
『全唐詩』
「M moires de Fanny Hill, femme de Plaisir」（Oeuvers de John Cleland）